

## 国際協力事業の大切さと、タイで高齢者らの支援活動を行った海外協力隊員の体験談を聞く

IIN の会員ら 14 人が 5 月 11 日、JICA 関西を訪れました。恒例の訪問はコロナ禍で中断して 3 年ぶりになります。

### JICA (Japan International Cooperation Agency) とはー

- 1) 正式には「独立行政法人国際協力機構」のことで、関西センターは神戸市中央区にあります＝写真右。ODA (政府開発援助) の二国間援助の「技術協力」「有償・無償資金協力」を担っています。JICA 海外協力隊は赴任先の開発途上国に住み、現地の慣習を尊重しながら、そこでの社会、経済などの向上に取り組むボランティアです。
- 2) 世界 196 の国・地域の約 80 億人のうち、開発途上国と呼ばれるのは約 80% (150 か国、60 億人以上) を占め、JICA はこれらの国・地域で事業を展開しています。
- 3) 世界有数の二国間援助機関であると言われています。



この日は、JICA 関西開発教育支援事業担当の山本果奈さん＝写真左＝が、途上国問題を SDG s の観点から紐解き、日本のかかわりの実態を説明しました。(SDG s は国連が 2030 年を達成目標とする全ての国の持続可能な開発目標です)。

山本さんの説明によるとー

\*世界全体の食糧援助量は 400 万トン。一方、日本の廃棄食料は 600 万トン (平成 30 年度推計)。

\*人間らしい暮らしをするために 1 日に最低限必要とされる水の量は 50 リットル (トイレの水を含む)。ところが、日本では 289 リットルも使っています。それほど豊かになった日本ですが、終戦直後は最貧国に近い状態でした。

過去を振り返ると

\*戦後の復興のため、日本は世界銀行などから膨大な額の財政支援を受け、東海道新幹線や黒部ダム等を建設した。

\*2011 年の東日本大震災の後には、途上国を含む 174 の国・地域、43 の国際機関から 1640 億円の支援を受けました。

「困った時はお互い様」、「できる事をするのが国際支援」という考え方が大切で、” Leading the

world with trust”（信頼で世界をつなぐ）が JICA のビジョンになっています。

## タイで理学療法士として活動した協力隊員の体験談

次に JICA 海外協力隊経験者の東山みどりさんが、派遣国のタイで理学療法士として活動した体験談を話してくれました。

\*期間：2016 年～2018 年（タイ語の語学研修の派遣前訓練）

\*派遣先：バーンシートン市。バンコック近郊で、チャオプラヤ川が流れる。人口は 9,700 人で高齢者は約 1,500 人。

\*仕事内容：高齢者・障害者へのリハビリ訓練の提供。ケアワーカーの指導や訪問理学療法の提供も。

スピーチの概要は以下の通りです。

私の最初の苦労はタイ語でした。42 の母音と 28 の子音を持つタイ語の会話の難しさと、句読点のないタイ語の文章の判読の難しさに苦しめられました。派遣前の訓練では担当の先生に心配され、現地のカウンターパートに「あなたは何かできるの？」と聞かれたほどでした。その時は「やってみないと分かりません」と正直に答えるしかありませんでした。

ただ、実際の活動に入ってから、返答や説明に困った時、カウンターパートは「気にしないで」と否定することなく気長に待ってくれました。わからない事、できない事は正直に伝えて、頼ることも大切だと気づきました。また、切り替え上手な柔軟性を持って、相手に合わせることの大切さを知りました。「言葉よりも大切なこと」を学ぶことができました。

ただ、タイ語に「お疲れさまでした」という気持ちにぴったりの言葉がなかったのは残念でした。

異文化社会での戸惑いも日々ありました。人々が時間の感覚が希薄というだけではなく、バスの時刻表がないほどでした。来るバスに乗ればいいからです。任地によって、また、車の多い道なのに歩道の無いところもあって、そんなところでは自転車に乗るのも危険を感じました。食事は香辛料が強く、味付けの違いがありました。

プミポン国王崩御の際は夜中の 2 時に出発して宮殿にお参りに行くなどし、現地の同僚、ボランティア、地元の人たちとの交流が持てるようになってきました。

日本の製品や CM に詳しく日本文化に興味のある人たちが少なくなく、共有できる素地があるからか、親しくなりやすかったです。国民のほとんどが仏教徒で“微笑みの国”とも言われるタイの人たちは、すぐに他人と仲良くなる上、楽しむことが上手です。私も、見習う事にしました。



カウンターパートとともに治療などについて話し合う東山さん(右端)

仕事では、デイケアセンターでリハビリ訓練をしたり、歩行困難な患者さんには器具を作って提供したりしました。また、多くの老人の参加者と体操をしたり、患者さんの個人宅に医師と同行してリハビリをしました。

タイでは、寝たきりの家族がいても、家の中に他人を入れたくないという風潮が一部に残っていました。しかし、私たちが関わってきた家族の多くは職員やボランティアが介入していました。ボランティアの活用は、彼らによって地元の情報を役所が吸い上げ、集中化して必要な対処にあたるためです。

在宅の寝たきり患者のなかには、衛生的にも厳しい環境にあって匂いが気になる場所もありました。しかし、患者さんの不自由な身体が少しでも動くようにと、リハビリを提供する事に専念し、成果がほんの少しでも上がってくると、それが大きな喜びと感ずくようになりました。匂いなどは気にならなくなりました。

活動の中で一番の成果と感じているのは、リフト付きの自動車の購入ができたことでした。「草の根運動人間の安全保障無償資金協力」を申請したところ、購入にたどり着くことができました。この自動車で、今まで来ることができなかった人々が、デイケアセンターに来ることができるようになりました。時には、この車が救急車代わりの役目も果たしました。

---

### 《筆者の感想》

『人に尽くすと自分に返って来る』というタイの人たちの考え方を、東山さんも身をもって示されていました。柔軟さと明るさと謙虚さで異文化の壁を乗り越えられ、タイ国に理学療法の一歩を残された。そんな素晴らしさが伝わる体験談と思いました。

### 《IINの参加者たちの感想》

・JICAの職員のお話は大変興味深かったです。

特に2011年に日本が世界で一番多くの援助を受けたという話は、不自由のない生活を満喫しながら、「上から目線」で「貧困や自然災害、紛争、戦争などで苦しんでいる地域を支援せねば」と寄付したり、fair tradeの物品購入に拘ったりして、いい気になっていた私。日本も、戦後だけでなく、あの東日本大震災の折にも、世界中の人から支援を受け、助けてもらった国なのだと再認識する機会となりました。

・東山さんは就職後に仕事をしながら協力要請が出るのを待って応募されたそうなので、その募集を探すところから志を高く持ち続けておられたようですね。異国で活動するためには準備段階から語学に体力にパワーが要りますよね。それもどうやら楽しかったけど苦労しながら(タイ語の話はおもしろかった)終えられ赴任。2年の任期はおそらく長くて、信念が強くないと、途中つらい場面もあったことでしょう。異文化ギャップを淡々と明るくお話されていたのも印象的でした。なぜこの人達はこうなのだろう？といつも一歩引いて考える姿勢が良かったですね。現地の方々にも



可愛がられていたようで、それが彼女の持つお人柄であり、乗り越えて来られた秘訣だと思いました。

・食堂でこの日は東ティモール料理＝写真右＝をいただくことができました！これも毎回の楽しみの1つです♡

・食堂で日替わりのエスニック料理をいただきましたが、初めてのスパイスで面白かったです。

（ジャイカ関西 1 階食堂では月替わりのエスニック料理などを、ハラルにも配慮して提供しています）



展示室には途上国からの民芸品や衣装などが多数、展示されています

・展示室には、SDGs についての説明パネルや各国の民芸品などが展示され、わかりやすかったです。ただ、文章での説明が多いので、動画やイラストを使って、文をできるだけ減らした方が、とっつきやすいのでは、と思いました。

・青年海外協力隊員の現地での体験談には毎回のことながら感心し、脱帽の思いです。言葉、習慣、宗教、気候、文化、食べ物等々の違いからいろいろ、苦労があるはずなのに、違いを乗り越え、と言うより、むしろ、楽しもうとされる人が多いのに敬意を表したいです。

以上